『移動とことば』

目　次

序章　なぜ「移動とことば」なのか　川上郁雄　1

## 第1部　移動の中のことばとアイデンティティ

第1章
**「ハーフ」の学生の日本留学**
言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー
岩﨑典子　16

第2章
**移動する青年のことばとアイデンティティ**
オーストラリアで継承日本語を学ぶ学生の事例から
倉田尚美　39

第3章
**日仏国際家族環境を背景に持つ日本語専攻修了生の「移動」の経験と意味づけ**
山内薫　63

第4章
**子どもたちが「移動しながら生きる自分と向き合う」授業実践**
シンガポール日本人学校の事例から
本間祥子　87

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章
**外国につながる子どものキャリアデザイン**
「国」「ことば」の認識との関わりに着目して
人見美佳・上原龍彦　106

## 第2部　移動の中のことばとライフ

第6章
**国際結婚家庭2世代の「移動」と「選択」**
母から娘の50余年間の軌跡をたどる
三宅和子　126

第7章
**ある中国残留孤児の系譜**
一世から四世までのインタビュー
上田潤子　149

第8章
**移住者の語りに見られる「経験の移動」が示唆するもの**
Agencyという観点から
八木真奈美　171

第9章
**国境を超えたあるろう者のライフストーリー**
ろう者にとっての「移動」と「ことば」
大塚愛子・岩﨑典子　190

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10章
**移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活**
山下里香　214

第11章
**「移動する子ども」からモバイル・ライブズを考える**
川上郁雄　245

展望討論
**「移動とことば」研究とは何か**
三宅和子・岩﨑典子・川上郁雄　273

あとがき　モバイル・ライブズを生きる、研究する　三宅和子　294

執筆者一覧　296

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

序章

# なぜ「移動とことば」なのか

川上郁雄

## 1.　移動する人々という課題

国連の国際移住機関（IOM）は今日の世界人口のうち 10 億人、7 人に 1 人が移民[1]であると推定している。また、IOM の発表した『2018 年版世界移住報告書（World Migration Report）』によると、2015 年には国境を越える移民が 2 億 4400 万人に達し、難民・避難民は 6000 万人を超えているという。その背景には、自然災害、紛争、社会・経済的不均衡など多様な要因があることも指摘されている。ここでいう移民には多様な人々が含まれる。移住者、外国人労働者、国際結婚家族、ビジネス・パーソン、留学生、旅行者、不法滞在者など多様なカテゴリーでくくられる人、また年齢層も子どもから高齢者まで幅広い人が含まれている。

同時に、テクノロジーの発達により、避難途上の難民の携帯端末からリアルな映像がインターネットを通じて世界に発信されることがあるように、私たちの日常世界は、情報化、ネットワーク化、グローバル化の流れによって急激に変化してきている。人々の移動のバリエーションは数え切れない。ある地点からある地点への一方向的な移動だけではなく、複数地点間の移動も

1　IOM の「移民」とは、「(1) 法的地位、(2) 移動が自発的か非自発的か、(3) 移動の理由、(4)滞在期間に関わらず、本来の居住地を離れて、国境を越えるか、一国内で移動している、または移動したあらゆる人」をいう（国際移住機関「IOM とは」<http://www.iomjapan.org/information/>）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

# 「ハーフ」の学生の日本留学

## 言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー

岩﨑典子

## 1. 背景

### 1.1 アイデンティティとことば

近年応用言語学におけるアイデンティティの概念は社会学のポスト構造主義理論に基づく捉え方が主流である（Block, 2007; Norton, 2013 参照）。個々人は自分の帰属する民族や国家などの文化的グループに基づいて安定した本質的核を持つという従来の捉え方と異なり、アイデンティティは多様で動態的かつ流動的で矛盾をも内包すると考えられている。たとえば Hall（1990; 1996）は、（ディアスポラの）文化的アイデンティティは常に生産過程であり変容を続けると捉える。したがって、アイデンティティの自己意識は伝統への帰還ではなく伝統の創造であり、「ルーツ（roots）へ戻る」というより「経路（routes）を受けとめる」ことであるという（Hall, 1996: 4）[1]。そして、人は他者との関係の中に存在し、他者との差異の認識によってアイデンティティが構築されるという。

Wheedon（2004）は、他者との関係性において重要な役割を果たすのがことばで、ことばによって主観性（自己の意識、情緒、願望）が構築されると

1　英語文献の引用は筆者による和訳である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

# 移動する青年のことばとアイデンティティ

## オーストラリアで継承日本語を学ぶ学生の事例から

倉田尚美

### 1. はじめに

「海外在留邦人数調査統計」が示すように、オーストラリアにおける日本人永住者数（52,978 人）はここ 25 年の間に約 9 倍に増加し、駐在員の家族を含む一時滞在の日本人数（39,659 人）を近年上回るようになってきた（外務省, 2017）。それに伴い、オーストラリア生まれ、または幼児期や学齢期に両親とともに日本から移住した子女も増加している。そのため、週末に開かれる都市部の日本語補習授業校（以下、補習校）の児童・生徒の大多数は永住家族の子女が占め、その数は増加の一途をたどると言われている。また、オーストラリアの小・中・高等学校レベルにおいても、2000 年以降の日本語を継承語・母語とする児童・生徒数の上昇が報告されている（de Kretser & Spence-Brown, 2010）。しかしながら、このような学習者の増加にも関わらず、オーストラリアの日本語教育機関の多くは日本語を外国語として学ぶ者のみを対象にしており、継承語話者を対象としたコースは、週末の日本語補習校を除き、今までほとんど存在しなかったのが現状である。このような継承語学習者のニーズに合ったプログラムの不足した状況はオーストラリアに限らず、米国を含む世界各国でも報告されている（Douglas, Kataoka, & Chinen, 2013 参照）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

# 日仏国際家族環境を背景に持つ日本語専攻修了生の「移動」の経験と意味づけ

山内薫

## 1. はじめに

### 1.1 日本語学習に関わる「移動」という課題

人は、恒久的につくり出されることばで自己表現しながら、全生涯という時間的な「移動」と学習環境の変化という空間的な「移動」を統合しながら、永続的に「移動」している。その中のある時期、ある空間に位置づけられる大学時代および大学という学習環境において、日本語を、母語あるいは自身が優先的に用いる言語（国際家族の環境を背景に持つ者にとっての優先言語）としてではなく、外国語として学ぶことにより、学ぶ者はどのような「移動」を経験しているのか。

本研究の対象は、フランスの国立大学の学士課程日本学科で主専攻として日本語学習を経験した修了生である。山内（2015）において、筆者は、修了生を対象に大学時代および大学という学習環境で日本語学習を経験する意義に関し考察した。その論考では日本語主専攻の学生で留年や中退、転科をすることなく修了した学生を対象に調査を行い、大学時代および大学という学習環境での外国語としての日本語学習経験が自己のあり方、および自己と社会との結びつきを内省する機会となることを明らかにした。この結果を踏まえ、本章では日仏国際家族環境の背景を持つ学生を例に「生涯の連続的な各

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

# 子どもたちが「移動しながら生きる自分と向き合う」授業実践

## シンガポール日本人学校の事例から

本間祥子

### 1. 問題の所在

本章は、海外の日本人学校に通う子どもたちが、「移動しながら生きる自分と向き合う」ことをねらいとした授業実践を通して、日本人学校における「ことばの教育」について論じるものである。

文部科学省（2016）によると、約4万人の日本の子どもたちが、日本人学校や補習授業校などの在外教育施設で学んでいる。かつて、在外教育施設で学ぶのは、1960年代頃から急増した日本人駐在家庭の子どもであり、海外子女教育研究では、このような子どもを対象とした研究が積み重ねられてきた（芝野, 2016）。しかし、1990年代以降、日本人永住家庭や長期滞在家庭、国際結婚家庭の子どもなど、多様な背景を持つ子どもたちが著しく増加し、従来のように日本への帰国を前提とした教育を行うだけでは、十分に対応しきれないことが指摘されるようになった（佐藤, 2010）。

このように新たな局面を迎えた海外子女教育研究における課題の一つは、複数の言語を学びながら成長する子どもたちのことばの問題である。これまで、主に補習授業校で日本語を学ぶ、国際結婚家庭や長期滞在・永住家庭の子どもたちを対象とした研究が数多く行われ、近年では、新しい補習授業校のあり方についても議論されるようになった（たとえば東京学芸大学国際教

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

# 外国につながる子どものキャリアデザイン

## 「国」「ことば」の認識との関わりに着目して

人見美佳・上原龍彦

### 1. はじめに

近年、日本で生まれても日本語以外の言語も使用する複数言語環境で育ったり、あるいは外国で生まれても日本語で育ったりした、外国につながる子どもたち（以下、〈子どもたち〉とする）が増加している。そして、その〈子どもたち〉が成長し、高校卒業後の進学や就職をする契機を日本で迎える事例が増えてきており、キャリアデザインに対する支援が必要になってきている。しかし、実際の支援は、支援者や親の意向から支援内容が決定されることが多く、〈子どもたち〉自身がどのようにキャリアデザインを考えているのかという点には十分に目が向けられているとは言えない。たとえば、〈子どもたち〉に対する支援の中で、「Z国人だからZ語とZ文化も知っておかないと」、「Y国と日本の架け橋に」、「日本で生きていくためには母語よりも日本語をしっかり勉強しないと」という支援者の声をたびたび耳にする。一方で筆者らは、「私って日本との架け橋にならないといけないんですか？」、「X語ができるからこの仕事を選んだけど、自分には合わない」という声を〈子どもたち〉から聞くことがあった。しかも、実際に進路を選択していくと、「架け橋」となるような職業や母語にあたる言語を生かした就職先が多くはないという現実にも突き当たる。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

# 国際結婚家庭2世代の「移動」と「選択」

## 母から娘の50余年間の軌跡をたどる

三宅和子

### 1. はじめに

本研究は、「戦後は終わった」といわれた1960年代にイギリスに渡り永住した日本人女性と、その女性とイギリス人の夫との間に生まれた娘の人生の軌跡をたどりながら、2人にとって日本、日本語の意味、自らの位置付けが、社会の変化とともに行われる「移動」と「選択」の中で、どのように変化してきたかを考える。

従来「移民」という場合、ハワイや南米の移住者たちのように移住先で日系人コミュニティを形作って生活する人々が思い起こされがちであった。またそれらの人々を対象とする研究の積み重ねも多い。しかし、近年は「国際移民の時代」(カースルズ・ミラー, 2011) といわれるように、さまざまな形の「移動」が世界中で起こっており、トランスナショナルな移動やディアスポラという視点から日本人の「移民」を捉える論考が増えている。

ヨーロッパ圏においては、早期から日本人が渡航していたものの、世界的な規模で見れば少数であり、集団的な移民という形を取っていないこともあり、調査の対象にのぼることがなく、その言語実践や言語生活実態を捉えた研究はほとんどない。自由意思で渡欧した人たちの多くは、個別的な理由やきっかけで定住し個々の生き方をし、共同体を作るだけの集住性も紐帯も生

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章

# ある中国残留孤児の系譜

## 一世から四世までのインタビュー

上田潤子

### 1.　はじめに

1945 年の終戦から 70 年以上が過ぎ、かの戦争の経験者は日に日に減っていく。しかし、私たちがみな、かの時代を生きた人々の子孫であることは確かであり、今後の人類も彼／彼女たちの末裔であることに違いはない。私たちが現在享受しているものは、先人たちから引き継いだものであり、今後私たちの子孫は私たちが築いた社会の中に生まれ落ちる。その意味で、過去を振り返り、そこから今後私たちが進むべき方向を見出そうとすることは有意義であると考える。

本章では、12 歳の時、中国東北部で終戦を迎えたある少女（フミ子）と、その子孫たちの人生に目を向ける。国家に翻弄され、代々「中国残留孤児」と名付けられてきた人々は、現在日本各地で私たちの隣人として暮らしている。本章の目的は、彼女たちの生きてきた歴史をたどることにより、彼女たちを含む多種多様な背景を持つ人々が共に暮らす社会について再考することである。

いつの時代も、人々は移動をしてきた。歴史の中の人々の移動も、個人に焦点を当てれば、複数の言語、複数の文化の間で葛藤する人々、移動しながら複雑で多様な自己形成の過程を経る子どもたちの姿が見られたはずで

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

# 移住者の語りに見られる「経験の移動」が示唆するもの

## Agencyという観点から

八木真奈美

### 1. はじめに

「移動とことば」を考える時、「移動」と「ことば」をつないでいるのは、移動する主体となる人であろう。日本は1990年に入国管理法を改正し、経済的な観点から日系人などの受け入れを決めた。その後も受け入れは続き、30年近く経過した現在、在留外国人数は過去最高を更新している。日本において、彼らは「移民」ではなく、「生活者としての外国人」と呼ばれている。この表現は2006年の「『生活者としての外国人』に対する総合的対応策」(外国人労働者問題関係省庁連絡会議。以下、連絡会議)において使われた呼び方である(足立, 2013)が、今日では文化庁の日本語教育事業をはじめとして日本語教育の分野でも定着した感がある。確かに、この表現は「生活」という側面に言及はしているものの、彼らが「どういう外国人か」というカテゴリーを示したにすぎない。連絡会議の中間整理において、「日本語能力が十分でないこと等から(中略)現に生活者としての問題が生じているところである」(外国人労働者問題関係省庁連絡会議, 2006)と説明されているように、受け入れから30年近く経過した今日でも「日本語能力が十分でない外国人」というラベルのもとで議論され続けることになり、「外国人」としてではなく一人の人間としての生き方や考え方、希望、困難、そして一

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章

# 国境を超えたあるろう者のライフストーリー

## ろう者にとっての「移動」と「ことば」

大塚愛子・岩﨑典子

### 1. はじめに

ライフストーリー研究は、個人の経験の語りであるライフストーリーを用いた研究である。社会学や人類学でも盛んに用いられ、応用言語学においては、移動がもたらす移民の主観性（subjectivity）やポジショニング、アイデンティティの意識について近年多くの知見をもたらした（Atkinson, 2002; Hyvärinen, 2008; 川上, 2014a）。国境を越える移動を経験した人々のライフストーリーは、移動がいかにアイデンティティの変容や意識の変化をもたらすかを物語っている（三代, 2011；川上, 2013；Esteban-Guitart & Vila, 2015）。しかし、主観性やアイデンティティに影響をもたらす移動は、国家間の移動だけではない。川上（2009）は国家間を含む空間的移動のほかに言語間の移動や言語教育カテゴリー間の移動も念頭に「移動する子ども」のライフストーリーを探り、「移動する子ども」がいかにさまざまな移動を経験するのかを示した。さらに川上（2017）は、子どもたちのさまざまな移動がいかに「常態」であり、その子どもたちの生のリアリティを「移動とことば」という軸を用いることにより、どのように捉え得るかも示している。このことは、子どもだけでなく、過去にこのような子どもであった人々、つまりさまざまな移動を経験した大人の生を見つめる時にも不可欠な視点であると言えよう。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10章

# 移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活

山下里香

## 1. 問題意識

移動を経て日本に暮らす子どもたちは、日本語以外の言語と日々接触していることも多い。そうした日本語以外の言語は、「継承語（heritage language）」（中島, 2002）や、「移民言語」（庄司, 2017a）または「移民の母語」（庄司, 2017b）と呼ばれることがある。「継承語」の定義は、研究者や地域の間で一定ではないが（Leeman, 2015）、多くの場合、国語や公用語など国の多数派の言語に対して、移民や少数民族に「属している」と思われる言語を指す。積極的に継承語教育に取り組んできたカナダでの研究歴の長い中島は、「異言語環境で親や祖父母から世代を越えて子どもに受け継がれていくことば」（2002: 1）と定義しながらも、教育における母語の重要性が前提となる彼女の論考では、ほぼ「母語」と同義として扱っている。一般的には、日本国内に暮らす日本人はこれらすべてを日本語のみで行っている（またはそうみなされている）。社会言語学の入門書を読めばすぐ分かることだが、家庭で養育者とのやりとりを通して習得する言語（＝これまで「母語」と呼ばれてきたもの）、出身国の学校で用いられる教育言語、出身国内のそれぞれの地域で用いられる地域言語、宗教知識の媒介となる言語がそれぞれ異なる場合が世界には多々ある。帰属する民族集団や出身国によって「継承語」

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 11 章

# 「移動する子ども」から モバイル・ライブズを考える

川上郁雄

## 1. 「移動とことば」から見る子どもの生

人の移動は 21 世紀の現代社会における重要かつ看過できない視点となっている。たとえば、日本の場合、日本から海外へ移動する人が増加している。海外に 3 ヵ月以上在留している日本国籍者数は、過去最高の 130 万人を超えている（外務省, 2017）。うち半数以上が女性で、その数は過去 20 年間で漸増し続けている。米国、中国、オーストラリア、タイ、カナダ、イギリス等に居住する在留邦人が多い。

観光による人口移動も見逃せない。たとえば、日本の場合、訪日外国人は年間約 3000 万人（観光庁, 2018）、日本人出国者数は約 1800 万人となっている（法務省, 2017）。移動の理由も、観光のほか、出張、転勤、結婚（離婚）、留学など多様である。

ただし、これらの統計資料は、一定の場所を視点にした人口動向の数字である。その統計結果は、現代社会の一面を反映してはいるが、ポストモダン社会に生きる一人ひとりの個別的で動態的で複合的な生のリアリティは十分に把握できない。移動の中で生きる人々は何を思い、どのような社会認識や自己認識を得て生きているのか。今、それらを把握する方法論が問われてい

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

展望討論

# 「移動とことば」研究とは何か

三宅和子・岩﨑典子・川上郁雄

編集委員 3 人は全章を読んだ後、2018 年 3 月 8 日、ロンドン（同日朝）、東京、仙台（同日夜）の 3 地点を Skype（スカイプ）でつなぎ、今後の課題と展望について討議した。本書の全体テーマである「移動とことば」の研究から何が分かったのか、研究視点、研究方法、さらに考えなければならない課題、今後の研究と実践の方向性等について、3 人それぞれの意見を交わした。「移動が常態」の現代にふさわしい時空間での議論となった。本稿は、Skype 会議の後、それぞれの発言を整理し、3 人で加筆してまとめたものである。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

## 今、「移動とことば」に関心が高まっている

**三宅**：2016 年 1 月に「移動とことば」研究会を始めて、3 回続けましたよね。各回の発表を聞いていくにつれ、どの研究もインタビューやライフストーリーなどの質的な調査で、数量的な調査のみで構成された研究は一つもなかったのが印象的でした。質的研究と一口に言っても、論文における語り口や質感がそれぞれ違う点がおもしろかったです。

**岩﨑**：それに、本間さん（第 4 章）の授業の実践についての対話や山下さん（第 10 章）のエスノグラフィックな調査など、インタビューやライフストーリー以外の方法を用いた質的調査もあり、「移動とことば」についての知見が広がり、さまざまな角度から考えることができました。人見さん・上原さん（第 5 章）のように長期的に主体を捉えたり、山内さん（第 3 章）のように生涯教育の中で大学での学習を考察したりなど、長い目で主体のライフを見るという視点も貴重ですね。

**川上**：確かにそうですが、どの論考も「移動とことば」の視点でどのように論じるか、これまでの研究にない方法でどう論じるか、試行錯誤というか、苦労があったようにも感じましたね。

**三宅**：試行錯誤という点に関しては私も本当にもがきました。「移動する人々」のどの側面に焦点を当て、どのように切り取り、どのように提示していけばいいのか…正解や正攻法はないので、個人の生に寄り添いつつ、研究として成り立たせていくという大変チャレンジングな課題をみなさんが背負っていたと思います。

**川上**：「研究会」で研究発表を公募した段階で、たくさんの方から応募がありましたし、実際に、研究会に参加された方もたくさんいましたね。

**三宅**：今の世界的な情勢が影響しているのでしょうね。「移動とことば」を自分の問題あるいは研究テーマだと感じる教育者や研究者が増えているの

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers